（様式第３号）

平成２９年１１月１７日

登米市議会議長　　及　川　昌　憲　　殿

会派　太陽の会
代表　　氏　家　英　人

調　査　報　告　書

調査の概要は次の通りであります。

１　調査目的　　新庁舎建設の取り組みについて

・　事業概要について
・　調査建設のコンセプトおよび庁舎の特徴について
・　構想・建設の場面での議会の関わりについて
・　住民の合意形成、反応について

健康寿命延伸都市・松本の取り組みについて

・　事業の概要について
・　健康づくり課の取り組みについて
・　こどもの生活習慣改善事業について
・　食育推進事業について

日本で最も素晴らしい公共施設といわれる図書館について

・　公開プレゼンテーションについて
・　図書館の特徴について
・　機能性について、とくに現地調査を交え伺いたい。
・　図書館建設にいたるプロセス（住民意向等）について

２　調査先および日時

新潟県燕市	１１月６日	１０：４５～１２：１５
長野県松本市	１１月７日	１０：２０～１１：５０
長野県小布施町	１１月８日	１２：５０～１４：２０

３　調査期間　　平成２９年１１月６日から１１月８日まで　３日間

登米市議会
受
29.11.17
付

4　調査の経過と結果、ならびに所見　　別紙添付

5　添付書類　　行政視察資料（②庁舎概要編）：燕市
松本市　健康づくりの取組み：松本市
小布施町の概要：小布施町

6　調査者氏名　　氏家英人、曽根充敏

御　旅　程　表

登米市議会(登米・みらい21/太陽の会/岩渕正弘)行政視察　様

(株)岩手県北観光　本社営業企画部
盛岡市厨川1-17-18
TEL019-641-8811
総合旅行取扱管理者:中井秀則　担当者:中井秀則

ご旅行名：H29/11/6～8 燕市・松本市・小布施町図書館視察
ご出発日：２０１７年１１月０６日　（２泊３日）　方面：中部　新潟・長野　　旅行ｺｰﾄﾞ：041117110052

月日	ご旅程	ご宿泊・備考
第１日目 １１／６ （月）	はやぶさ102号 くりこま高原駅 ++++++ 大宮駅　乗換 ++++++ 燕三条駅 ６：５７発　８：３０着//８：５０発　１０：１５着 5分 ･････ ﾄﾖﾀﾚﾝﾀｶｰ 三条店　手続き 500m　１０：２０ 17分 ═══ 燕市役所　視察 ═══ 8km　１０：４０～１２：００	朝食：－ 昼食：－ 夕食：－
	15分 ═══ 三条燕IC ═══ 2H40 上越JCT ═══ 更埴JCT ═══ 松本IC ═══ 7分 松本駅前　ｼﾝｸﾞﾙ6室　1泊朝食 8.2km　232km　3km ﾎﾃﾙﾆｭｰｽﾃｰｼｮﾝ　宿泊	松本駅前 ﾎﾃﾙﾆｭｰｽﾃｰｼｮﾝ TEL0263-35-3850 松本市中央1-1-11
第２日目 １１／７ （火）	ホテル １０：００頃 8分 ═══ 1.4km　松本市役所　視察 １０：３０～１２：００ 14分 ═══ 4.5km　松本IC 40分 ═══ 56.4km　長野IC 25分 ═══ 10.0km	朝食：○ 昼食：－ 夕食：－
	═══ 長野駅前　ｼﾝｸﾞﾙ6室　1泊朝食 ﾎﾃﾙﾅｶﾞﾉｱﾍﾞﾆｭｰ　宿泊	長野駅前 ﾎﾃﾙﾅｶﾞﾉｱﾍﾞﾆｭｰ TEL026-223-1123 長野市南千歳2-8-5
第３日目 １１／８ （水）	ホテル ９：４０頃 35分 ═══ 15km　R18 ═══ 小布施町図書館 まちとしょテラソ　視察 １３：００～１４：３０ 40分 ═══ 20km　R18 ═══ ﾄﾖﾀﾚﾝﾀｶｰ 長野店　返車手続き １５：２０迄に返車 5分 ･････ 300m	朝食：○ 昼食：－ 夕食：－
	･････ かがやき542号 長野駅 １５：４９発 ++++++ 大宮駅　乗換 ++++++ はやて113号 １６：５４着//１７：２２発 ++++++ くりこま高原駅 １８：５９着	

※当日の天候・道路状況により移動時間に変更が生じる場合がございますので、予めご了承下さい。

登米みらい２１、太陽の会、岩渕正弘　合同　政務調査報告　（報告者：太陽の会）

調査項目　新庁舎建設の取り組みについて

① 事業概要について

② 庁舎建設のコンセプトおよび庁舎の特徴について

③ 構想、建設の場面での議会のかかわりについて

④ 住民の合意形成、反応について

調査月日　平成２９年１１月６日（月）

調査場所　新潟県燕市　燕市市役所

担当説明職員　議会事務局　局長　　幸田　博

議事課　課長　　川崎　祐晴

議事課　課長補佐　丸山　篤

燕市　概要

燕市は、越後平野の中央に位置し、新潟市と長岡市の中間に位置し、北陸自動車道三条燕インターと上越新幹線燕三条駅があり、在来線や国道が整備され交通網が充実している。

面積 110.96 ㎢、人口，80,909 人　29,005 世帯、信濃川とその分流の中ノ口川、西川など恵まれた水利を利用し米作りが盛んであるが交通網にも恵まれ商工業も発展を遂げている。特に、金属洋食器、金属ハウスウェア製品は国内の主要産地となっている。

現在の燕市は、明治の大合併、昭和の大合併へ経て、平成 18 年 3 月 30 日、旧燕市、吉田町、分水町が合併し新生燕市が誕生した。一般会計予算は、381 億である。

事業の概要

新庁舎の敷地面積は，35,932 ㎡で地上 4 階、延べ床面積 11,443.66 ㎡、高さ 24m、構造は鉄筋コンクリートである。庁舎には一般職員 374 名、臨時職員 89 名総数 463 名が配置されている。防災拠点機能の強化という面から免震構造を採用している。　省エネ対策をはじめ、環境負荷低減配慮して、建築環境総合性能評価システムにおいて最高評価であるＳランクを取得している。

建設事業費は、工事請負費　39.5 億、用地取得造成費 6 億、備品購入費 2.2 億などで 50 億円である。財源の内訳は、合併特例債が 38 億、県の合併特別交付金 9.6 億であり一般財源は、1,359.6 万円となっている。

庁舎建設の基本コンセプト

市民が自然に集い、気軽にくつろげ交流することのできる市民の「えん側」となるよう、市民同士、市民と行政の燕（えん）を結ぶ「4 つのえん側」の立体的なつながりで一体感の醸成を図り、賑わいのあるまちづくりの拠点となる庁舎を目指す。

＊４つのえん側

① ふれあいのえん側…庁舎南側の各階の待合スペース

② にぎわいのえん側…まちづくり広場と隣接するウットデッキスペース

③ 協働のえん（援）側…「つばめホール」
④ まちのえん（燕）側…エントランス及び東側の屋根付き空間
＊防災拠点機能
①ヘリポートの設置（屋上）②非常用電源設備の整備（塔屋階）③防災対策室の設置（３階）④免震構造の採用（地下）⑤環境共生型庁舎としての環境対策機能について（自然エネルギーの活用…スイング窓、風力発電、ＬＥＤ照明の導入）
議会とのかかわり
合併協議の段階から検討され、それぞれの３市町で協議し、在任特例期間（７か月）は、全員協議会や一般質問などで論議し、改選後、基本構想策定状況の説明を受けて、平成１９年６月に議員全員で「新庁舎建設等特別委員会」を設置して２２回の会議で調査、検討を重ねてきた。
住民合意形成・反応
庁舎建設は、新市の市長選の一つの争点となったこともあり、「新庁舎建設市民検討委員会」を各種団体推薦と公募委員５３名（当初は３６名の予定）で構成し論議をしたが、必要性と位置について方向性がまとまらず両論併記の中間報告がされ、その後、機能や位置について合併協議で方向づけられた候補地（旧吉田町）で委員会の了解を得た。
基本構想や基本計画策定時に「広報つばめ」に特集記事の掲載や，ホームページ内に「新庁舎建設コーナー」を設け詳細資料の掲載するともに関係資料を公共施設に配置した。
また、「新庁舎建設お知らせ版」の全戸配布、住民向けの事業説明会（３地区）の開催、出前説明会（１７回）の実施、設計者の選定の公開（審査、提案パネル公開展示）やワークショップを開催し市民の事業に対する関心を高めた。
◆所見：新潟県燕市
平成 18 年 3 月 20 日に燕市・吉田町・分水町が対等合併して新「燕市」が誕生。人口は 81,350 人で、面積は 110.88 ㎢となっており、面積は小さいが、人口規模、また合併市であり分庁方式であるというところも登米市と類似している。
新庁舎建設事業は市長選の争点となり、建設反対を訴えた候補者が当選。しかし、3 分庁舎の老朽化、高度情報化への対応やバリアフリー化の抜本的対策、また、分庁方式の弊害（行政効率の悪化、住民サービスの低下など）、などにより新庁舎を建設することになった。
新庁舎建設事業費は約 50 億円で、財源は合併特例債が約 8 割を占めている。登米市でも 4 月に執行された市長選で新庁舎建設問題が大きな争点となり、建設反対を訴えた候補が貧差で勝った。しかしながら燕市のように「30 年後の燕市の姿」を考え、方向転換することも市民に受け入れられると感じた。
合併特例債の発行期限は平成 37 年まで。
登米市は約 200 億円分の事業が合併特例債を発行することで形にできる市だ。将来の登米市のために、今、すべきことは何か。30 年後の登米市を見据えた決断が求められると改めて感じた。

◆調査報告書　　（報告者：太陽の会）

平成29年11月7日（火）
調査場所：長野県松本市（松本市役所）
調査内容：健康寿命延伸都市・松本の取り組み

① 健康寿命延伸の取り組みについて
② 健康づくり課の取り組みについて

調査説明員：　松本市
健康福祉部健康づくり課　　課課長　林　裕子
議会事務局　　次長　逸見和行
主査　吉沢武士

◆調査概要

松本市は東西52.2㎞、南北41.3㎞で面積は978.47㎢あり、長野県内1位の広さである。また、人口は240,276人、世帯数は103,708世帯で、老年人口割合は27.3%である。

松本市では「単に平均寿命が延びても健康でなければ幸せな人生とはいえない」むしろ「健康寿命を延ばすことが人生の質を高めることにつながる」という医師でもある菅谷市長を先頭に「美しく生きる　健康寿命延伸都市・松本」を市政運営の柱に据えたさまざま取り組みを実施している。

松本市では「健康」とは「身体の健康」のみならず、①教育・文化の健康、②経済の健康、③環境の健康、④生活の健康、⑤地域の健康などを包含し、行政、市民、産・学が三位一体となり「健康」を「より良い状態を保つこと」として設定している点などが学ぶべきところである。

◆事業概要

この事業は現首長の政策の柱であり、松本市基本構想２０２０に挙げた松本市の将来都市像と据えられている。「健康寿命延伸都市・松本」の創造は、単に体の健康づくりにとどまらない「人」、「生活」、「地域」、「環境」、「経済」、「教育・文化」の6つの領域における、人と社会の健康づくりを目指した総合的なまちづくりであり、庁内部署を超えて常に問題意識をもって取り組まれているものである。

世界の誰もが経験したことのない超高齢化時代において、今、行政に改めて求められる最終命題は、そこに住む人々に「生きていて良かった、このまちに住んでいて良かった」

という肯定感を抱かせる、「生きがいの仕組みづくり」となることを目指すとして継続的に事業展開されており、その際にはコミュニティ単位での啓発活動の実施などにより、住民生活に根差した活動が行われている。

子どもが未来を語り、若者が地域づくりに参画し、高齢者が自身の知識や経験を地域で生かし、それぞれの居場所で生きる喜びを実感できるような「生きがいの仕組みづくり」を進め、「健康寿命延伸都市・松本」の号令の中、広く市民に理解された政策の柱といえよう。

◆所見

登米市の健康寿命は県内35市町村中、男性が76.56歳で県内ワースト2位、女性は82.34歳でワースト3位であるため、先進的に健康寿命の延伸政策に取り組んでいる松本市を調査した。

松本市では、急速に進む少子高齢化型人口減少問題に対応するため、これまでのまちづくり政策を2段階で方針転換。菅谷市長が就任した平成16年からの1段階は、3K（健康、子育て、危機管理）に取り組み、市長2期目の平成20年から2段階（健康寿命の延伸）に取り組み現在に至っていた。

「地域力の向上が健康づくりの原点」という考えから、まず、住民自治力、地域教育力、地域連携力を高めることで地域課題を解決し、ひいては生活の質の向上につなげていく。結果的に「市民生活の質の向上が健康寿命の延伸につながっていくことになる」という考え方には共感させられた。

特筆すべきは、松本市では健康づくり推進員を設置し市民の健康づくりの一翼を担い「健康寿命延伸」に向けての活動を展開しているところ。昭和50年からの設置で、OBは2万人を超えている。平成29年度現在では866人（女性：807人、男性：59人）が活動し、健康づくりの輪を広げるさまざまな運動を展開しているところも素晴らしいと感じた。

登米市でも市民の健康づくりに向けた取り組みを実施しているが、横への広がりが感じられない。そこで、登米市も各地域に「健康づくり推進員」を設置するなどし、横へと広がる取り組みへと転換すべきだと考える。

登米みらい21・太陽の会・岩渕正弘　合同　政務調査報告　（報告者：太陽の会）

調査項目　日本で最も素晴らしい公共施設といわれる図書館「まちとしょテラソ」

① 公開プレゼンテーションについて

② 図書館の特徴について

③ 機能性について、とくに現地調査を交え伺いたい。

調査月日　平成29年１１月８日（水）

調査場所　長野県小布施町

担当説明　図書館館長　関　良幸

臨時職員　司書　千葉

議会事務局長　山崎博雄

小布施町の概要

1. 小布施町の歩み

明治22年、7村が合併し小布施村に、3村が合併し都住村となる。

昭和29年2月、小布施村が小布施町になり、11月小布施町と都住村が合併し小布施町となる。

「平成の大合併」では、町の個性生かしたまちづくりを進めるべきとの町民意思により、平成16年2月に自立宣言をし、自立の道を歩んでいる。

2. 面積・人口

面積は19㎞²で、県内で一番狭い自治体である。町の中心部から半径2㎞ほどにすべての集落があり、生活面でも行政面でもコンパクトにまとまった町といえる。

人口は、ここ30数年、11,000人前後推移しているが、高齢化は進んでいて、定住促進が町の大きな課題となっている。

3. 歴史・産業

幕末に土地の豪商高井鴻山が葛飾北斎を4回招いたことにより、肉筆画、天井画がたくさん残っていて、それらを集めて昭和15年「北斎館」がオープン。以来、街並修景事業ともあいまって、観光客が訪れるようになり、現在では年間120万人もの人々が訪れている。

戦前は養蚕、戦後はりんごを中心とし、現在はりんご・桃・なし・プラム・などの果樹栽培が盛んで、農業で成り立っている。

高井鴻山記念館

葛飾北斎館

小布施町立図書館まちとしょテラソの背景と活動

1. 図書館の歴史

大正 12 年、日本の学制 50 年を受けて図書館建設の機運が高まり、開設には 3 年かかると思われたが、寄付・蔵書が一気に集まり、わずか 3 ヶ月で後に、長野県下で 9 番目の公共図書館として開館した。

その後移転を繰り返し、昭和 54 年、役場庁舎が新設されたこともあり、図書館が 3 階に置かれた。庁舎内という合理性はあったが、利便性はあったが、利便性に欠け、狭隘であったこともあり、更には長野県下では電化が一番遅れてしまったこともあり、平成に入ると早くも独立建物としての図書館が要望された。

2. 新しい図書館の思い

平成 19 年 3 月、「図書館のあり方の検討会」から提出された報告書の内容を十分に尊重し住民懇談会や意見交換会を踏まえ、新しい図書館は「学びの場」「子育ての場」「交流の場」「情報の場」のを 4 つの柱として、「交流と創造を楽しむ、文化の拠点」を運営の理念とし、建設に向けて動きだした。

3. 設計者と館長の全国から募集

設計は全国から 166 の募集があり、一次選考・二次選考を経て最終的には 5 案を町民公開のプロポーザル審査を行い、ナスカー級建築事務所・早稲田大学教授の古谷誠章に決定した。館長は 25 名の応募があった。

町民は約 100 人で組織する建設運営委員会で、古谷氏の設計の案を様々な角度から意見交換会して修正を施していった。

4. 本と人を繋ぐ場

新たな作品・作家との出会いを演出

① テラソ百選

毎月テーマを決め、スタッフ手作りのポップを添え、閉架を含めた書籍を展示する。

例　3 月「北陸を読む」　4 月「北斎と善光寺を読む」　5 月「絵本を読む」

② 本の福袋　「読本福来」

本 2 冊を内容が推定できるキーワードを貼付けし書名がわからなくならないように包装する。

包装を開くときのわくわく感を演出する。

③ スタッフのお薦めコーナー

④ 追悼コーナー

⑤ 本を介して人と人をつなぐ場

本の無料配布「ブックリサイクル」、おはなし会の皆さんによる「読み聞かせ」、ひとり語り「耳なし芳一」・メンコ・ビー玉などの「昭和の遊び」指導、伝統文化体験「能楽を体験しよう」、パラソルの下でコーヒーを飲みながら読書「カフェテラソ」など行う。

⑥ まちじゅう図書館

酒屋・味噌屋・銀行・郵便局・カフェなどの一角に、仕事に関する本やオーナーの趣味の本を並べて、訪れる人と本を通じての交流を図る。

設計者の古谷氏の発案による、開館時にテラソを中心として街中に小さな図書館をたくさん作り、ICタグをつけて管理しようとしたが、予算上の理由により断念する。

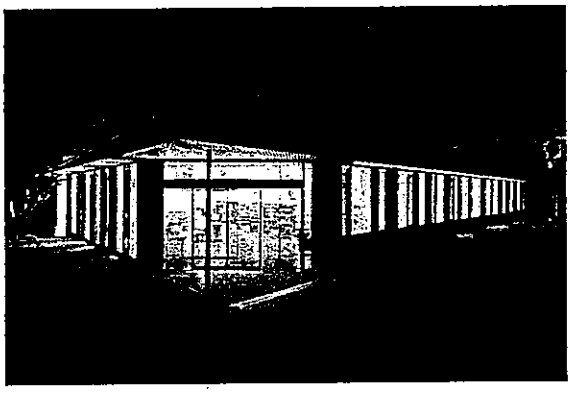
⑦ ワークショップ「本と話そう　よむ・かく・つくる」

本を読んだら、今度は自ら書いたり、描いたり、演じたりしてもらいたいことから、本に関係するワークショップを開催している。「かたのべ講座」「一茶でアート」「ハーブオイル作り」「筆で年賀状作り」を開催している。

⑧ 子育て

ボランティアのみなさまによる「読み聞かせ会」を月２回の実施を行っている。

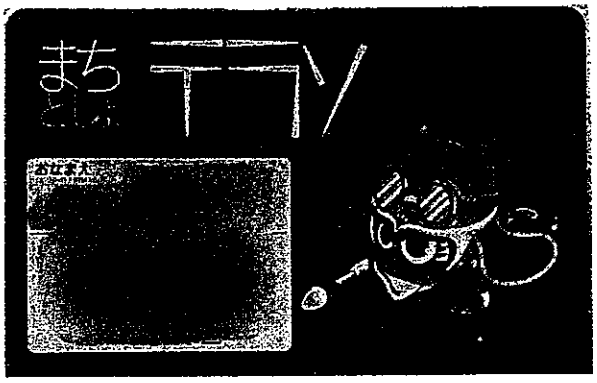
図書館外観



図書館内

図書館内

まちとしょテラソの利用カード



所見：長野県小布施町

小布施町立図書館「まちとしょテラソ」を視察調査した。

平成21年7月に開館した新図書館は、町民の「学びの場」、「交流の場」、「情報発信の場」、「子育ての場」の4つを柱に建設された。設計と館長は全国公募し、設計には全国から166の応募があったという。

旧図書館の年間来館者数は22,360人（平成19年度）であったが、新図書館が完成した平成22年度では約100,000人と大幅に来館者数が伸び、昨年度では143,632人が利用している。

図書館を中心にさまざまなイベントや行事が行われ、図書館が如何に町民の憩いの場、交流の場になっているのかが分かる。

登米市には合併前の迫町立図書館と登米図書館、そして中田生涯学習センター内の図書室の3館しかなく、旧町外の市民が利用するには遠慮がちだ。また、合併したら合併特例債を活用して人口規模に見合った新図書館を整備しようという構想があり、その構想は合併協議会から新市「登米市」に申し送られているという背景もある。

現地調査で、あらためて図書館を中心とした複合施設の必要性を感じた。市長の決断に期待したい。

（様式第３号）

平成３０年　２月　８日

登米市議会議長　　及　川　昌　憲　　様

会派　太陽の会
代表　　氏　家　英　人

調　査　報　告　書

調査の概要は次の通りであります。

１　調査目的　　ばれいしょ選果施設にかかる農業政策について
・農業生産向上に向けた取り組みについて
・販路拡大に向けた取り組みについて
・行政とのかかわりについて

２つの世界遺産登録への取り組みについて
・「明治日本の産業革命遺産」登録成功の実績
・「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」登録に向けた取り組み
・潜伏キリシタン関連施設の現状と、どのような推進をしているのか
・産業革命遺産登録の効果

武雄市立図書館について
・経過戦略について
・利用状況
・機能性について
・図書館運営に対する住民意向等について

糸島農協産直施設「伊都菜彩」について
・「日本一の道の駅」の概要
・「日本一の道の駅」の利用実態の調査
・「日本一の道の駅」の運営について
・「他施設」との競合、現地で知り得る特徴について

2　調査先および日時　　長崎県諫早市　1月30日　１５：００～１６：００
長崎県長崎市　1月31日　　９：３０～１１：００
佐賀県武雄市　2月１日　　９：００～１１：００
福岡県糸島市　2月１日　１４：３０～１５：００

3　調査期間　　平成３０年１月３０日～2月１日まで　３日間

4　調査の経過と結果、ならびに所見　　別紙添付

5　添付書類
視察先配布資料等

6　調査者氏名　　氏家英人、曽根充敏

平成30年「登米みらい２１」「太陽の会」合同視察団　行程

１日目（1月30日）

7:40　登米市役所
自家用車乗合わせ
仙台空港
全日空３１２０
福岡空港
レンタカー
諫早市（JA視察）
レンタカー
17:30　長崎市（宿泊）

視察地
JAながさき県央馬鈴薯選果施設
15：00～１６：００
宿泊先
矢太櫻

2日目（1月31日）

8:50　長崎市
レンタカー
長崎市役所（視察）
レンタカー
17:30　武雄市

視察地
長崎市世界遺産の取組み
9：30～１１：００
宿泊先
武雄セントラルホテル

3日目（2月1日）

8:45　武雄市
レンタカー
武雄市図書館
レンタカー
伊都菜彩
レンタカー
福岡空港
全日空１２７７
仙台空港
自家用車乗合わせ
20:40　登米市役所

視察地
武雄市図書館
9：00～11：00
JA糸島「伊都菜彩」
15：30～16：00

登米・みらい２１、太陽の会共通

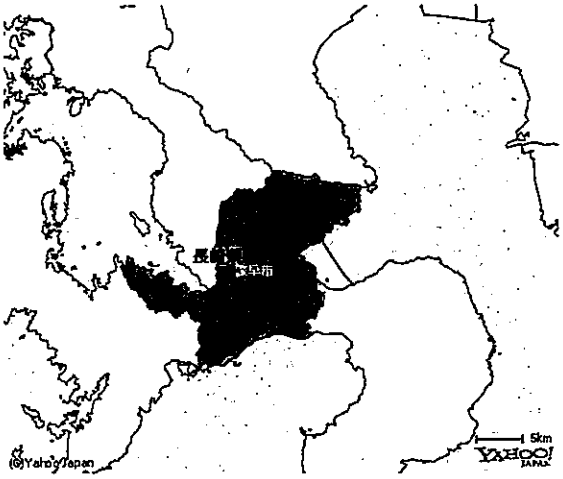
登米みらい２１・太陽の会合同政務調査報告

調査項目　ばれいしょ選果施設に係る農業政策について
　　① 農業生産向上に向けた取り組みについて
　　② 販路拡大に向けた取り組みについて
　　③ 行政とのかかわりについて
調査月日　平成３０年１月３０日
調査場所　JA ながさき県央ばれいしょ選果施設
　　長崎県諫早市天神前１１７４－１
説明職員　JA ながさき県央　営農部指導振興課 [redacted]
　　南部営農センター [redacted]

諫早市概要

諫早市は長崎県のほぼ中央部に位置し、東は有明海、西は大村湾、南は橘湾と三方が海に面した都市である。面積３４１．７９平方キロメートル・人口１３万６３８２人（平成３０年１月１日現在）。平成１７年３月１日に１市５町（諫早市、西彼杵郡多良見町、北高来郡森山町、同郡飯森町、同郡高来町同郡小長井町が合併して誕生した。

４本の国道・JR・島原鉄道が交わる交通の要衝で、長崎市・佐世保市に次ぐ長崎県内第３の都市である。

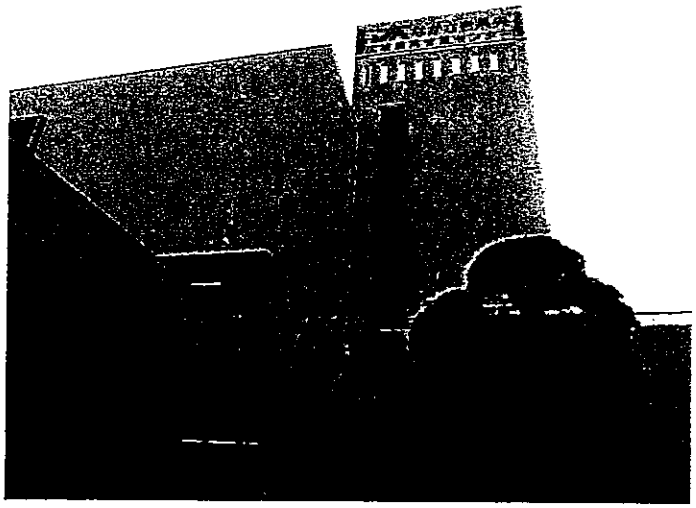


面積			341.79㎢
国勢調査 人口	(2010年)		140,752人
	(2015年)		138,078人
人口増減率 (2010～2015年)			-1.90%
		(※)	-2.39%
高齢化率 (65歳以上・2015年)			27.10%
		(※)	30.90%
人口密度 (2015年)			404.00人／㎢
		(※)	152.90人／㎢

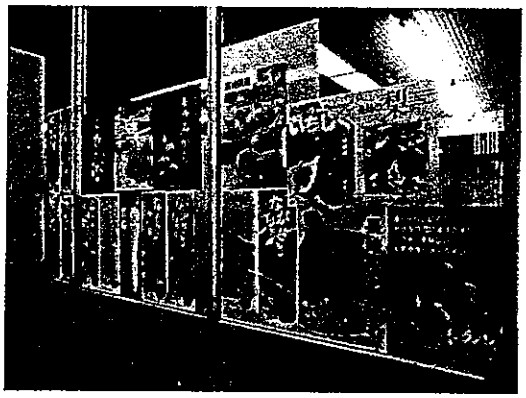
（※）比較地域：登米市
（→比較する地域を変更できます）

JA ながさき県央の概要

本店を長崎県諫早市栗面町に置き、２０００年（平成１２年）４農協の合併により設立し、出資金５１億円、総資産 1,543 億円、組合員数 37,399 人(正規 11,681、准 25,718)、職員数 918 人、役員 29 人、支店営農センターを合わせて 19 か所の店舗数を持つ農業組合であり、事業区域を諫早市、大村市、東彼杵郡東彼杵町、川棚町、波佐見町 2 市 3 町をエリアとしている。



平成 28 年度の販売高は、畜産の好調と馬鈴薯，人参、お茶、イチゴ、ミカンなどで 155 億円の実績を上げており、事業総利益 68 億２千万円、経常利益８億９千万円、当期剰余金６億４千万円となっている。



研修事項の概況

JA ながさき県央飯盛有喜支店の概況

諫早市の南部に位置し橘湾に面した地区にあり、畑作中心の営農形態で春は馬鈴薯、秋は人参、秋馬鈴薯、大根の栽培をしている。基盤整備も進んでおり、栽培効率も改善し、後継者も多い地区である。

畑地帯総合整備事業を平成 8 年事業採択され、平成１９年北部地区１３３ha、平成２３年南部地区１８４ha に完成し平成２７年有喜地区６０ha、（２９年１２月完成）実施

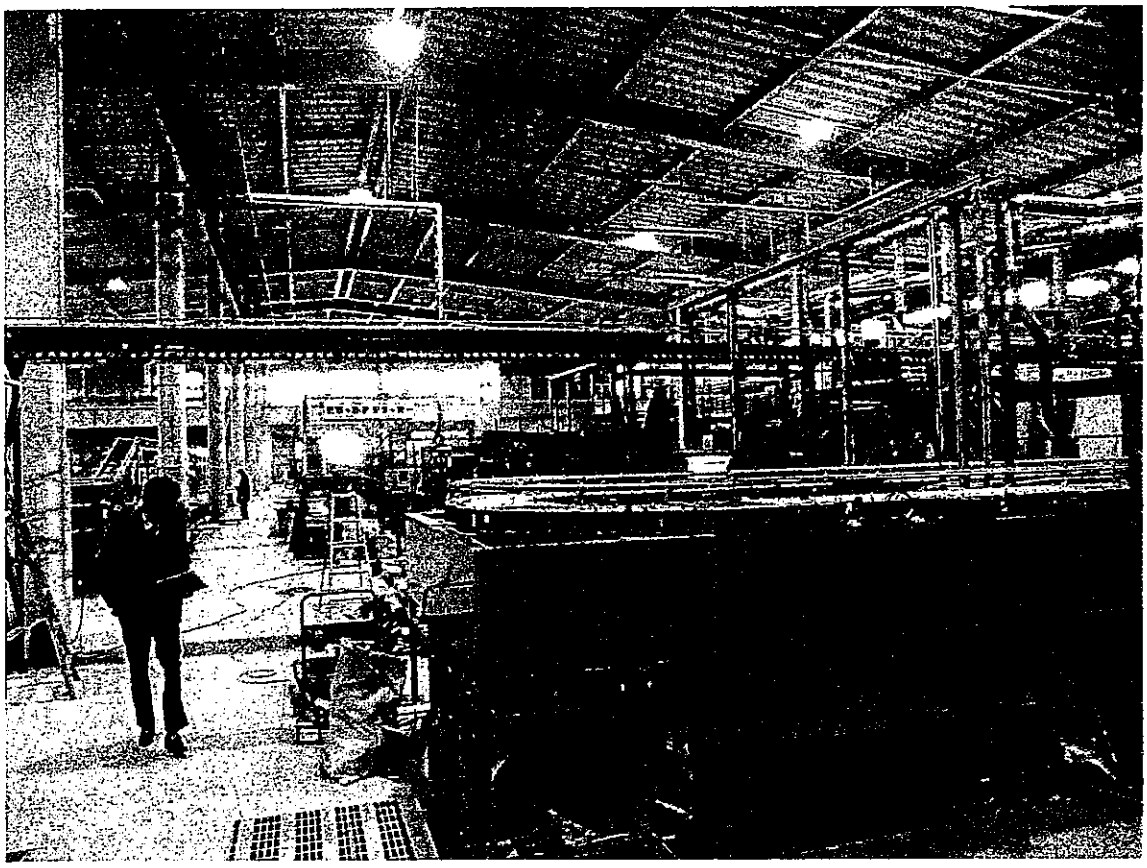
し、畑地の条件整備に取り組んでいる。

馬鈴薯部会は、部会員２９１名、栽培面積、春作３５０ha、秋作５５ha、品種はメークイン、ニシユタカ、アイユタカであり、出荷量10,488ｔ、販売金額20億9,799万円である。

人参部会は、部会員110名、栽培面積106ha、品種は愛紅・紅日向・敬紅などであり、出荷量5,142ｔ、6億593万円である。販売は、市場流通が主体であり、名古屋、大阪、広島方面へむけており、手数料は、10kg、155円である。

ばれいしょ選果施設の概況

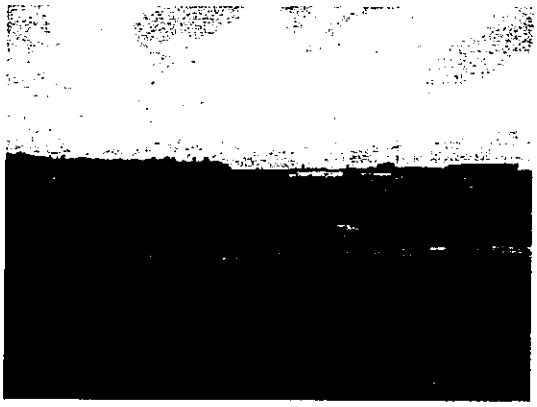
平成28年度産地パワーアップ事業に取り組み、選果能力日量１７０ｔ、貯蔵庫６００ｔ、鉄骨2階建て、延べ床面積８６６７．０５㎡の施設を18.7億で平成29年12月に完成した。財源は、国50%、県1億、市が1.8億。選果機は、ＰＫ式選別機6条2式、2系列外観判定装置（３Ｄレーザー処理）、箱詰装置、自動秤量機15台2系列を設置し、自動製函機、封函機を2系列整備し徹底した自動化に取り組んだ施設となっている。



太陽の会

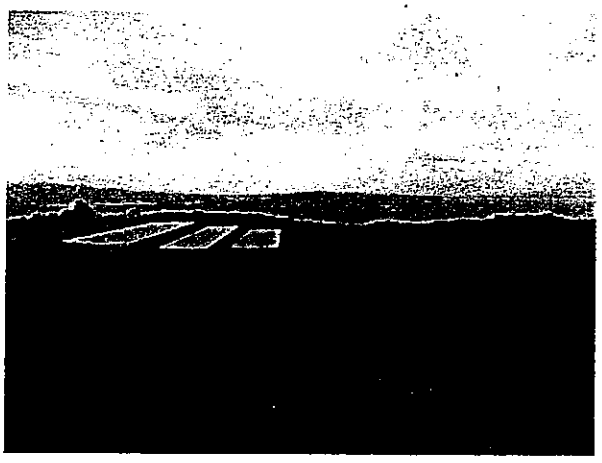
所感

諫早市を訪れて第一に感じたのは、農業用の平地がないことである。旧市街地を形成する三角州地帯があるが、商業居住区として開発が進んでおり、農用地とはなっていない。丘陵山間地と海に囲まれた地勢により、水稲に関しては利水の面などでも困難と思われる。この点において登米市のそれとは大きく異なる背景を感じた。

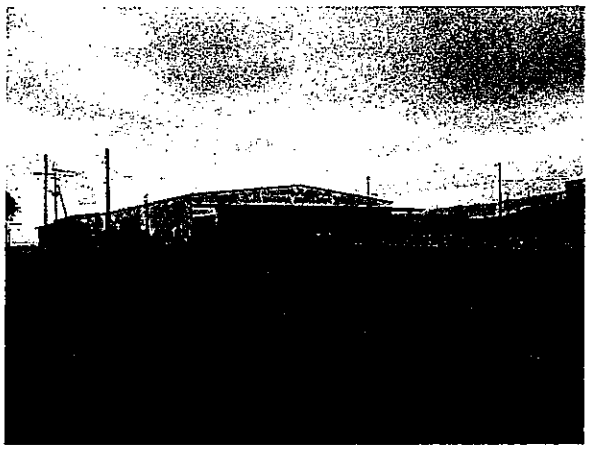


一方で、山間地には石組みによる開墾された畑地が整備されており、野菜作りが盛んな地域であった。実際、ながさき県央農協本店（旧市街地）からばれいしょ選果施設のある飯森地区まで、道すがら丘陵地帯には多くの基盤整備された畑地が段々に広がり、根菜系の作物栽培に利用されていた。

この視察で訪問した施設は飯森地区に新設されたものであるが、近隣には「にんじん・馬鈴薯選果場」があるとのことだ。現在（視察時点）は、「にんじん・馬鈴薯選果施設」を使用しての出荷を行っているが、更なる増産に対応するため今回の新設になるとのことだった（「にんじん・馬鈴薯選果場」の選果能力は１２０ｔ/日であり、新たな需要に対応できない。視察先の新「ばれいしょ選果場」隣接に新たな基盤整備が進んでおり、規模拡大が望まれていた。）。登米市の農業では後継者問題もあり、農業の拡大はあまり考えにくいとの認識の上で、後継者問題を尋ねてみたが、一様に家業を継ぐ風土があり農業自体、拡大傾向にあるとのことだった。この点でも登米市の例と異なる傾向にあると思われる。その背景には、反当80万円といわれる生産額があり、安定した収入が得られるほか、未開の丘陵地帯も多く、生産の向上がさらに見込まれることなども挙げられよう。

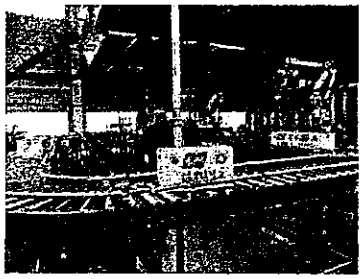


生産物の販売先（消費）については中京から阪神への出荷が大半を占めるとのことである。生産量が多いことから、企業向けの加工食材ニーズを予想していたが、そのような需要はないとのことである。人口



集中地区への安定的な販路があり、増産に対する不安などは全く感じられなかった。

この施設は、JA で整備したものである。行政との関わりを尋ねたところ、かなり大きなウエイトで行政の支援があったとのことだった。補助金や事務手続き等で、諫早市が大きくフォローしてくれたとのことである。本市農業では、自然環境の違いこそあるが JA や民間を含めた他団体との距離感という点については参考と出来る面が多々ある。未来志向の農業について関係団体ともっと積極的に関わるべきである。



◆調査報告書（2つの世界遺産登録への取組みについて：長崎市）

調査項目：２つの世界遺産登録への取り組みについて

・「明治日本の産業革命遺産」登録成功の実績

・「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」登録に向けた取り組み

・潜伏キリシタン関連施設の現状と、どのような推進をしているのか

・産業革命遺産登録の効果

調査月日：平成30年1月31日

調査場所：長崎県長崎市（長崎市議会議事棟）

説明担当：長崎市企画財政部

政策監　田中洋一

世界遺産推進室　係長　首藤充

長崎市議会事務局

議事調査課長　松竹美由紀

議事調査課　廣田公平

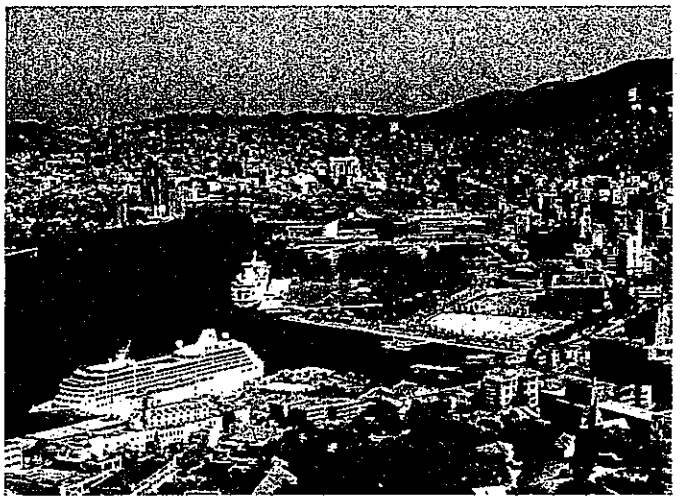
長崎市概要

長崎市は九州の北西部に位置する都市で、長崎県の県庁所在地である。また中核市に指定されている。面積４０５．８６平方キロメートル・人口４２万６７１人。市面積の13.1パーセントである市街地に人口の約78パーセントが住み、山間部にも建物が密集する。

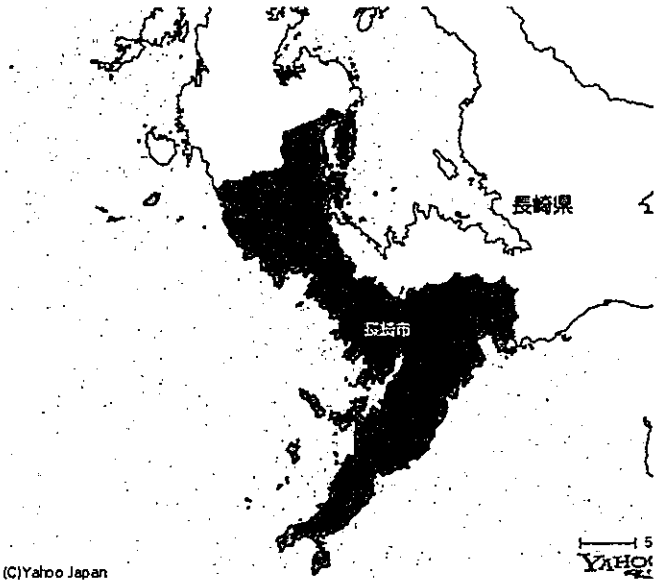
長崎市章

面積		405.86㎢
国勢調査人口	（2010年）	443,766人
	（2015年）	429,508人
人口増減率（2010～2015年）		-3.21%
		（※） -2.39%
高齢化率（65歳以上・2015年）		28.60%
		（※） 30.90%
人口密度（2015年）		1,058.30人／㎢
		（※） 152.90人／㎢

（※）比較地域：登米市
（→比較する地域を変更できます）



古くから外国への玄関口として発展してきた港湾都市であり、江戸時代は国内唯一の貿易港「出島」を持ち、ヨーロッパから多くの文化が入ってきた。外国からの文化流入の影響や坂の多い街並みなどから国内他都市とは違った景観を保持しており、観光都市としての要素も色濃くある。

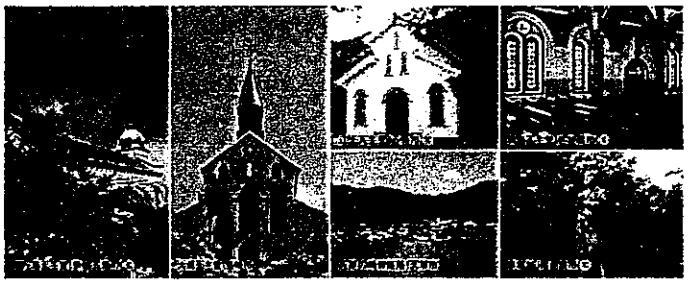


長崎半島および西彼杵半島を市域とする。２００５年１月の市町村合併では長崎半島西南部や有人島の離島である伊王島・高島・池島、石炭産業の衰退で無人島となった端島が編入された。さらに２００６年１月の市町村合併では大村湾沿岸の旧琴海町が編入合併された。

坂の街として有名であり自転車利用がほとんどない。また、市町村別人口減少数では上位にランクされ新たな課題となっている。

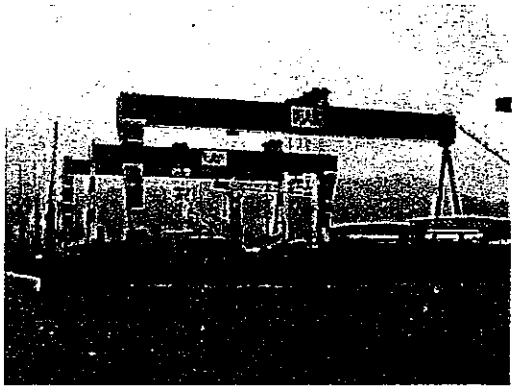
調査の背景

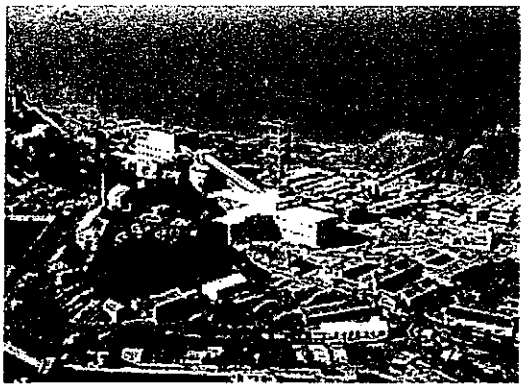
長崎市は、その歴史的経緯からカトリック教徒の数が比較的多いことでも知られており、特にカトリック教会は長崎県単独で一つの大司教区を形成している（(日本の大司教区は長崎大司教区・東京大司教区（東京都・千葉県）・大阪大司教区（大阪府・兵庫県・和歌山県）の３大司教区で構成)）。市内にはミッション系学校も多く、まちづくりのなかでキリスト教が住民生活に



溶け込んでいる印象がある。

また、同様に官営長崎造船所や高島炭鉱など三菱の企業城下町として繁栄した明治以来の歴史もあり、文明開化の匂い漂うまちでもある。





このような背景から観光都市としても知られるところだが、今回さらなる資源化として世界遺産登録を活用している模様である。

いま長崎市が取り組んでいる世界遺産登録活動は「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」と称した歴史の痕跡である。とくに「潜伏キリシタン」については、登米市においても同様の史実があることから、登米市においても活用できるヒントがないかを目的に調査することとした。

なお事前の調査で長崎市においては、さきに「明治日本の産業革命遺産」で世界遺産登録に成功している実績があるから、そのノウハウおよび効果の検証も調査項目とした。

世界遺産登録活動が盛んな経緯として平成23年の九州新幹線全線開業が一つの契機となっている。山陽新幹線と一本でつながるという新しい観光の視点から、主に九州新幹線沿線自治体から動きがあったものである。

もともと世界遺産は国の一本釣りのようなかたちで、国内の代表的な文化遺産を文化庁が主体となって候補を決めてきたものである。文化庁が考える国内遺産というものが概ね登録される見込みがたったことから、平成18年に自治体からの自己推挙制度が出来、それを活用する形で取り組みを決定したものだ。

「明治日本の産業革命遺産」登録の実績について

「明治日本の産業革命遺産」は、平成18年6月に行われた九州地方知事会で「九州近代化産業遺産の保存・活用」を政策連合の1項目として決定したことにはじまる。

平成18年11月に「九州・山口の産業革命遺産群（6県8市13資産）」として文化庁へ提案され、翌年1月の文化審議会では継続審査となった。12月には「九州・山口の近代化産業遺産群（6県11市22資産）」で再提案したものである。文化審議会では世界遺産暫定一覧表への追加が適当と判断し平成21年1月に世界遺産暫定一覧表（国内候補地リスト）に記載された。

平成25年「日本の近代化産業遺産群―九州・山口及び関連地域（8県11市23資産この時点で釜石高炉遺構が追加）」と名称を変更して9月には政府（内閣府案件）の推薦が決定、翌1月に推薦書をユネスコに提出した。

ユネスコ内では世界遺産登録についてICOMOSという諮問機関で調査を行っているが、現地調査を経て平成27年5月に世界遺産への記載勧告が為された。平成27年7月にユネスコ世界遺産委員会で正式に「明治日本の産業革命遺産　製鉄・鉄鋼、造船、石炭産業」の世界遺産として登録に至った。

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」登録に向けた取り組みについて

潜伏キリシタンについてもスタートは、平成18年の九州地方知事会である。長崎県として、何かできないことはないかと考え10月に関係自治体へ世界遺産登録の提案をしたものである。同年11月「長崎の教会群とキリスト教関連遺産（1県5市2町20資産）」として文化庁に提案された。平成19年1月には世界遺産暫定一覧表に記載されたのち5年程度の歳月をかけ、平成24年6月に国に対して推薦書案を提出したところだが、長崎県としての狙いは離島に多く点在する遺産候補を用い交流人口増も踏まえた推薦書案であった。同年7月の文化審議会において推薦の検討がなされたものだが、同時に提案された「富岡製糸場」の方がより推薦案件として優れており、また長崎の場合は日本全体としての認識がまだま

だ低いとのことや、「隠れキリシタン」についての言葉の概念が学術的な明確さがないことなどが指摘され選考に落選。同年の文化審議会推薦は見送られた。

平成25年1月に、これら指摘事項を修正し再提案したところ、文化審議会ではこの改善を評価し推薦可能と判断した。ただし、平成25年の審議については「産業革命遺産」も同時候補となっており、長崎として2つの候補を同時に持つことになる。長崎県及び長崎市としては、「キリシタン関連施設群」のほうが早い時期から取り組まれており「キリシタン」側に心を置いていたところであったが、「産業遺産」が内閣府推薦案件という形でもあり、産業遺産側に軍配が上がった。2年連続の落選にも、引き続きの活動により翌平成26年9月に政府推薦が決定し、平成27年1月にはユネスコへの推薦書の提出に至りICONOSの調査（1回目平成27年9月）までこぎつけた。

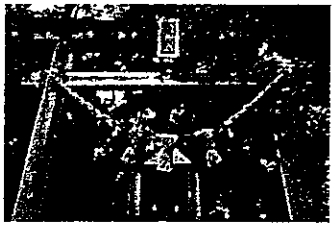
このICONOSの調査において「遺産とすべき構成や期間」について再考が促され（世界遺産決定するには弱い）、一旦この推薦は取り下げ再検討することになる。

あらためて平成28年9月に「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」と名称を変更し推薦書暫定版、平成29年2月に正式版を提出してICOMOS現地調査（2回目平成29年5月）ところである。

潜伏キリシタン関連施設の現状と推進方法について

構成遺産の分布については、迫害宗教でもあったことから、離島部分にも散見され大変な広範囲にわたる。世界遺産登録の推進体制は3つの会議（長崎県世界遺産登録推進会議・長崎世界遺産学術会議・長崎県世界遺産登録推進県民会議）と県及び市・町で役割分担をしている。

行政として県は推薦書作成周知啓発を担っており市・町は法的保護措置地域調整が主たる業務である。実際の構成候補施設については大浦天主堂のような有名史跡は稀であり、どちらかというと地味な資産での構成である。



産業革命遺産登録の効果について

長崎市の観光客数については平成 26 年 6,307 千人、27 年 6,694 千人、28 年 6,724 千人となっている。また代表的な構成資産のうち端島については同様に 191,881 人、286,936 人、265,555 人であり、グラバー邸宅は 1,035,796 人、1,221,243 人、987,822 人である。端島こそ数字上の跳ね上げがみられるものの、見学環境の向上に起因するところも大きいと思われ、また平成 28 年には熊本地震による落ち込みも考えられるところである。

もともと、観光地であったことを考慮すると、観光のバリエーションが増えたと捉えることは出来ようが、世界遺産単独で顕著な数字を示したのは端島のみともいえる。この端島も整備費用は莫大な経費が発生するとされ、整備基金を募っている。

説明については企画財政部からの説明であり、観光振興的要素からの視点ではないことは指摘できる。

所感

はじめに

今回の調査の目的として、米川地区に伝わる隠れキリシタンの歴史との比較に着目しての行政視察であった。

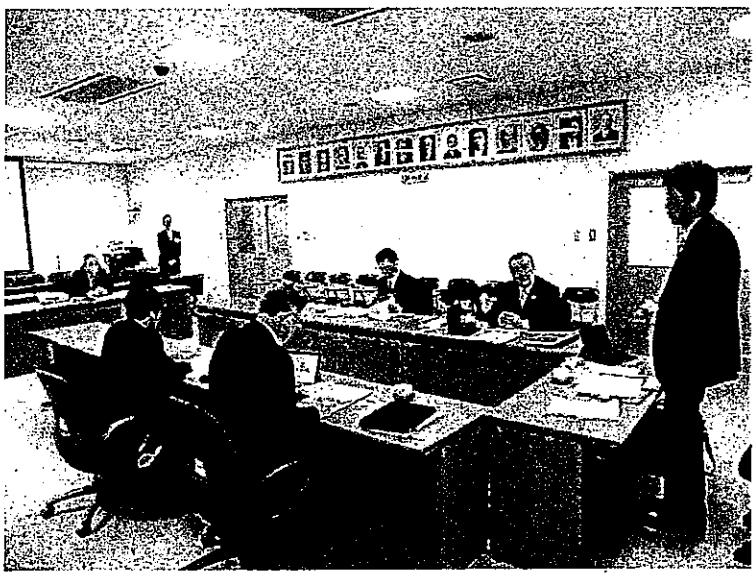
世界遺産は、痕跡が些細なものであっても認定される傾向があり、その意味は悠久の時の痕跡が認められるかにある。また事前の印象ではきらびやかな観光地化された構成よりも開発の手が入っていない施設において、登録される傾向を感じており「米川の隠れキリシタン遺跡」においては、その歴史や保存状態においてもかなりの潜在性をもった施設でないかとの推測から調査した。

長崎市において取り組んでいる「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の登録に向けた活動は同様の歴史を類推させるものであり、題材も同じ方向にあるものである。また過去の実績（産業遺産登録成功）にも優れており、世界遺産のノウハウを持っていると理解できる。

事前イメージとの相違

長崎市においては 2 つの世界遺産登録を目指し活動しているのは周知の事実であるが、その取り組みの時間軸について認識に間違いがあった。つまり「近代産業遺産」登録成功をもって、今回の「キリシタン関連遺産」についての活動を行っているものと考えていたが、実際には並行作業で行われていたものであり、むしろ「キリシタン関連遺産」の方が事業着手は早いとのことである。

また、長崎市ではすでに「近代産業遺産」において世界遺産登録を受けている。我々の印象では、このことにより観光需要の増加を望むところではあるが、当局においてはそのような捉え方はさほど重視していない様子である（説明所管が観光部署でなかったかもしれない）。その良い事例は、非公開遺産が含まれていることからも伺い知ることが出来よう。明治日本の産業革命遺産については全国に２３遺産あるが、このうち 8 遺産は長崎市内にある。しかしながら、市内にある 3 遺産については企業内施設であり一般公開されていない（遠望は出来る）。見学対象とならない施設があることは正直勉強不足であり反省するところでもある。観光資源という狭い見識を改めざるを得ない。



検証

長崎での史実であるが、

① １５９１年、宣教師が入り布教が広まったこと。

② １６１４年、キリスト教禁教。

③ １８６４年、在日フランス人（カトリック）のために大浦天主堂建設。

④ 外海地区で密かに信仰を伝えていた信徒が大浦天主堂で告白し、潜伏の歴史判明。

⑤ 信徒のための施設（カトリック教会）を信仰地に新たに建てる。

という流れがある。

これを登米市の「隠れキリシタン」に当てはめた場合には、

① キリシタン弾圧の歴史がある。

② 処刑場は密かに伝承され、三経塚などは現存する。

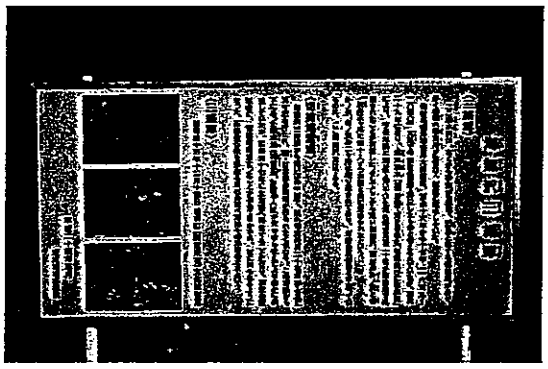
③ 米川地区においてはキリスト教の布教が現在も見られるが、これは昭和年代にカトリック教会が設置された後のものであり、史実とのつながりはないとされる。

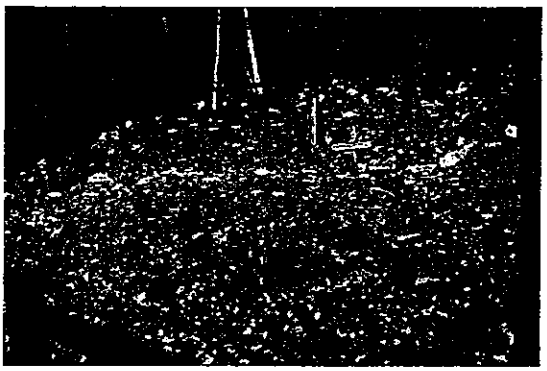
また、調査の中で明らかになったところとして、「隠れキリシタン」と「潜伏キリシタン」の学術的精査がある。我々の知るところのザビエル以来の歴史にのった史実の「隠れキリシタン」と禁教時代に口伝により伝えられたカトリックに由来する宗教を区分し精査したことは、登米市の持つ歴史認識とは異なるものであると感じた。

さらに「明治日本の産業革命遺産　製鉄・鉄鋼、造船石炭産業」では、調査の概要からもわかる通り世界遺産暫定一覧表への記載（世界遺産立候補の意思表示）から推薦書完成まで４年の歳月がかかっており、長崎市が中核都市であることや長崎県の支援も厚かったことを考え合わせると、大変なマンパワーと専門知識が必要なことを伺い知ることが出来る。正直、登米市単独での世界遺産立候補は、費用面でも厳しいものがあると感じとった。

ただし、世界遺産に頼らざるにしても、米川隠れキリシタンの歴史ポテンシャルは十分に活用できる資産ではないかとあらためて感じるところである。とくに歴史の伝達が途切れる危険を大きくはらむ時期にも差し掛かっているため、今まさに史実を整理し記録するときではないか。その整理の中から、新たな資産を生み出していきたい。

参考　米川綱木地区キリシタン史跡





◆調査報告書（佐賀県武雄市図書館）

調査項目：武雄市図書館について
・経過戦略について
・利用状況
・機能性について
・図書館運営に対する住民意向等について

調査月日：平成 30 年 2 月 1 日

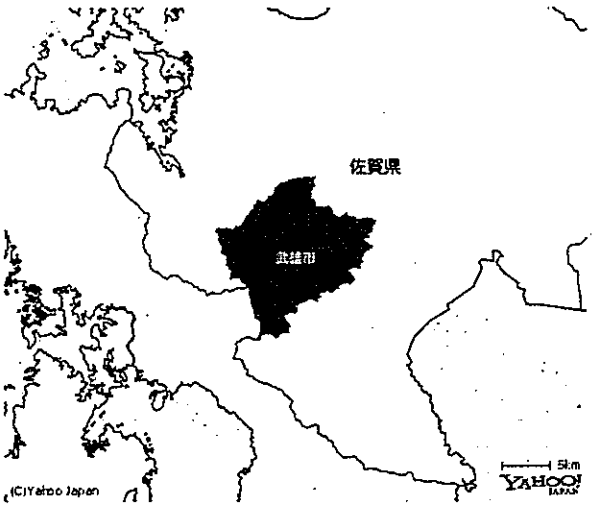
調査場所：佐賀県武雄市（武雄市図書館）

説明担当：武雄市図書館・歴史資料館
館長　　溝 上 正 勝
武雄市議会事務局
議事係長　吉 永 和 彦

武雄市概要

武雄市は佐賀県西部に位置する市。佐賀市と長崎県佐世保市との中間に位置する町で、中心部に武雄温泉がある。

地形は低山と盆地と川沿いの低地が入り組む地勢である。市域南東部の武雄盆地の西の端と、市域西側の盆地に人口が集中している他の地域は山地である。平成１８年３月、武雄市・北方町・山内町の１市２町が新設合併し、武雄市となった。面積 195.40 ㎢、人口 49,312 人（平成 29 年 12 月現在）。

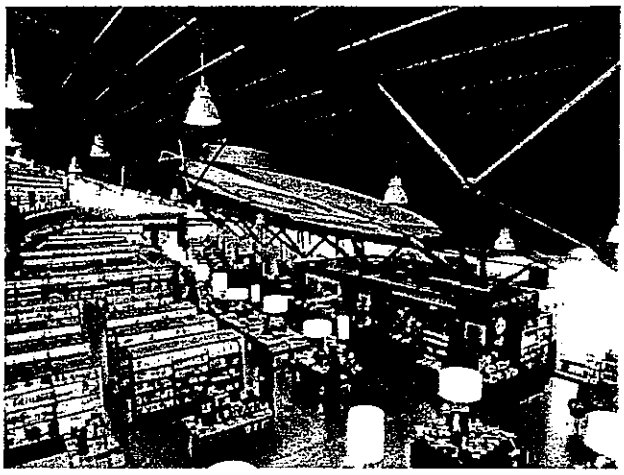


西九州の交通の要所でもあり、長崎自動車道と西九州自動車道の分岐があり、JR 佐世保本線武雄温泉駅は長崎新幹線の停車駅となる予定である。

面積			195.40㎢
国勢調査 人口	（2010年）		50,699人
	（2015年）		49,062人
人口増減率 （2010～2015年）			-3.23%
		（※）	-2.39%
高齢化率 （65歳以上・2015年）			28.70%
		（※）	30.90%
人口密度 （2015年）			251.10人／㎢
		（※）	152.90人／㎢

（※）比較地域：登米市
（→比較する地域を変更できます）

調査の背景



武雄市図書館は TSUTAYA 図書館としても知られ、全国に先駆けて図書館を民間委託したことで知られる。

その運営は民間企業らしい様々な技巧を凝らし、行政の範疇では取り組みが困難と思われる事業展開も行っているとのことである。また、住民の利用も顕著な実績をあげているとのことで、地域に親しまれている施設として大変興味深いところであった。

登米市では合併協以来の図書館構想があるが、いまだその具体的な方向性が見いだせずにいる。しかしながら近い将来には必ず事業展開されるものと思われる。多様な図書館について認識をもち、来るべきときに的確な提案スキルを持つことを目的に調査する。

調査の概要

① 経過戦略

武雄市図書館は２０００（平成 12）年１０月に開館した。施設は図書館と歴史資料館で構成されており平成 23 年度には来館者数 255,828 人、貸出利用者数 82,539 人の利用があった。開館から平成 19 年度をピークに利用者が頭打ちとなり、また固定化された利用に留まるようになったことから、「まちづくりの核」として、図書館機能をリニューアルすることにしたものである。

武雄市では政策的に子育て世代の定住を目指しており、この図書館構想はその中心の一つと位置付けられている。また子育て世代（30 代・40 代）の利用増を目論んでおり、ターゲットを明確にした戦略を立てていた。

図書館像としては

・図書館に縁遠い人の利用

・利用者目線にこだわったサービス

を目指している。

指定管理者導入については多分に首長の決断が強かったと見受けられたが、その理由として「行政でできなければ、民間の力で」という柔軟な発想に基づくものであった。

指定管理者には代官山で蔦屋書店を展開するカルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社（以下 CCC 社）を「口説いて」事業委託（指定管理）したもので、全国に先駆けた試みとなった。

② 利用状況

リニューアル前の実績については前述の通りであるが、民間のノウハウを利用した成果の下平成 28 年度実績で来館者数 688,710 人、図書貸出利用者数で 139,814 人を数えるに至る。図書貸出利用者数では年齢構成を把握することが出来るが 30 代・40 代の利用が目覚ましく増えており、20 代・50 代さらには小学校高学年とみられる年代でも顕著な改善が見て取れる。

利用者の地域に関してだが、武雄市内にとどまらず福岡や長崎といった他県からの利用も少なくない。返却の方法に郵送を取り入れることによって、利用者の便を図っている。

③ 機能性

図書館内に喫茶コーナー（スターバックスコーヒー）や書店（TSUTAYA 書店）が併設されており、営業スペースが設けられている。とくに書店を併設していることで雑誌に触れることが出来る。公共図書館では費用面から取り組みにくい分野にしても、売本の形をとることによって需要をカバーしている。また喫茶スペースにおいても、利用者ニーズを見越しての設置であり、このあたりにも民間の行動力を感じることが出来る。また貸出実務について

はＴカードを利用した管理が導入されており、無人貸し出しも可能としていることで人的コストの軽減が図られている。

平成 29 年、隣地にこども図書館を設置した。子育て世代政策を前面に出す戦略であり、まさしく就学前児とその親のためのスペースとなっている。一般図書スペースと別棟のため、子供と伸び伸び利用することが出来るよう配慮されている。

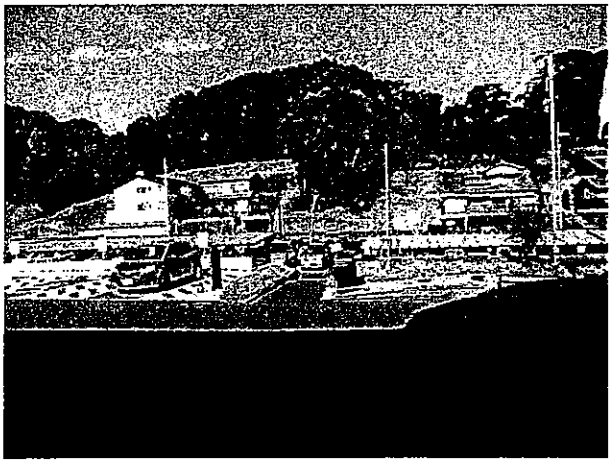
④ 住民意向

詳しくは別添資料によるが、特筆すべきは満足度が高い点にある。施設としてのハード面、またスタッフサービスに代表されるソフト面で８５％以上の評価が出ている。逆に不満要素は駐車場の混雑が挙げられている。正直、駐車スペースについては人口 5 万人規模の地方都市図書館駐車場としては、まともな規模を有すると感じたが、図書館自体の魅力が収容規模を上回っている結果である。

所感

施設から得られる感覚として洗練された空間をイメージできた。事実Ｕターン住民からは都会の雰囲気があると評判らしくこの点も利用者の増に関わっていると思われた。施設は指定管理によって民間らしい発想が随所に取り入れられているがその点も雰囲気づくりに一役買っていると思われた。

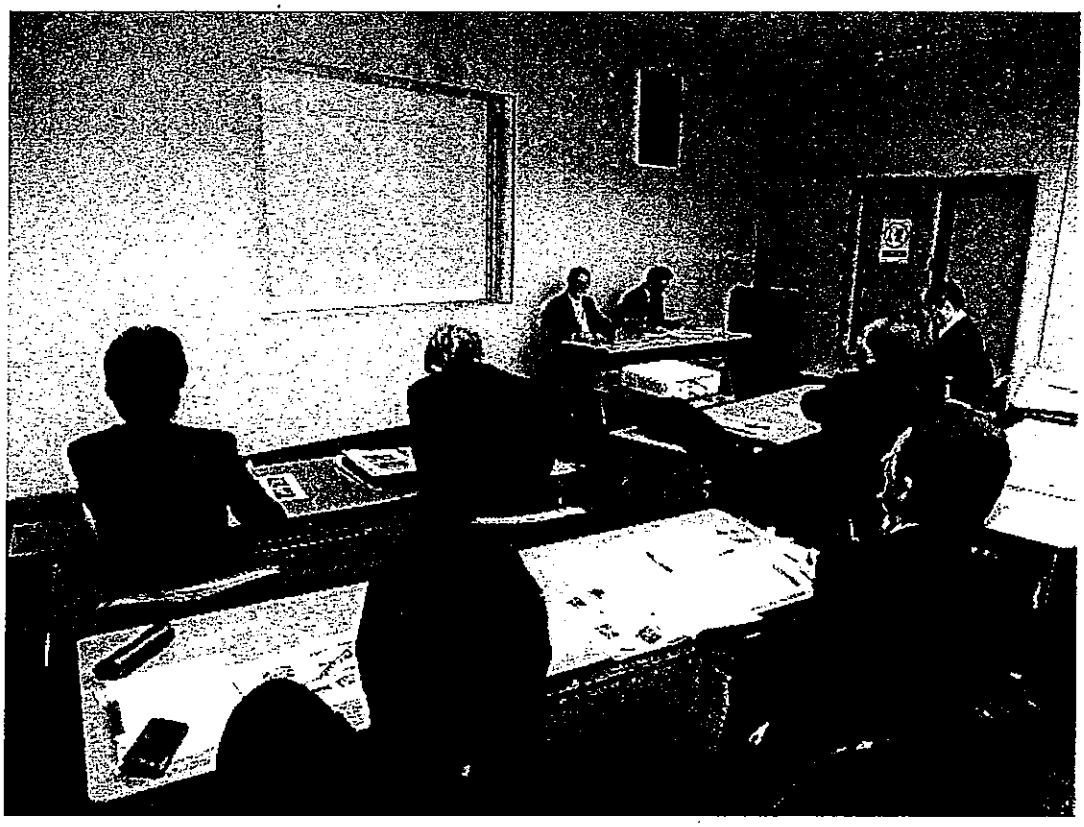
館長の身分はCCC社の従業員であり、武雄市に出向の形を採っている。この点に関しては問題ないが、図書館に従事する人間がすべて指定管理者の従業員で構成されることには若干注意が必要である。というのも民間企業の従業員であるから、辞令一枚で転勤が伴う。武雄市図書館の例では、育て上げた司書が独り立ちする段階で別施設（同様に自治体向けサービスを受託した先）に転勤になるということがあるとのことだった。武雄市図書館では赤字経営が見込まれても、企業として人材養成機関とした機能を持たせることで、この指定管理のメリットを創出していると考えられる。



このようなマイナス面もあるものの、住民サービスの向上といった点からはこの指定管理政策は確実な成果を揚げているといえよう。わたしたちが現地調査したのは平日午前中であったが、小一時間ほどで駐車場は満車に近い状況であった。従来の図書館イメージは調べ物をするところまたは本を借りるところといった感覚であるが、武雄市図書館においては「空き時間が出来たから図書館に行こう」という住民行動が見て取れる。

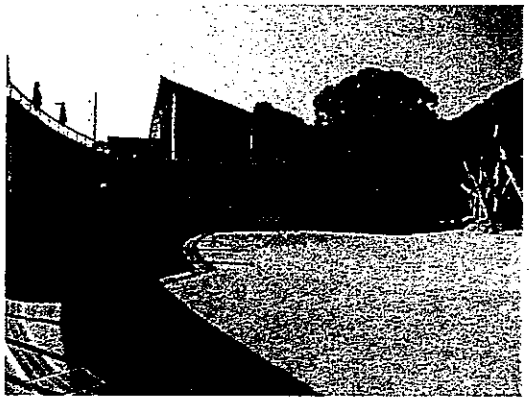
登米市においても、将来のまちづくりの拠点として図書館の活用が語られ、現実に具体的な準備を検討する段階が迫っている。直営・民営を別として住民吸収力がある施設に作り上げなければならない。表現は悪いが「今流行り」の図書館に総じて言えることは、時間を過ごす空間としての役割が充実していることである。また武雄市の先例は、子育て世代をターゲットにした施設づくりを行ったうえで、確実に成果が出たことだ。さらに戦略的に「子ども図書館」も設置したことで更なる子育て世代の支持を得た。これは、登米市が目指そうとしている子育て世代の移住定住に大きな効果を見いだせるものとして期待すると

ころが大きい。有利な起債が利用できる今こそ図書館を核にしたまちづくりについて、真剣に議論すべきである。



武雄市図書館

こども図書館



登米・みらい２１、太陽の会共通

◆調査報告書

調査項目：糸島農協産直施設「伊都菜彩」について

・「日本一の道の駅」の概要

・「日本一の道の駅」の利用実態の調査

・「日本一の道の駅」の運営

・他施設との競合、現地で知り得る特徴

調査月日：平成30年２月１日

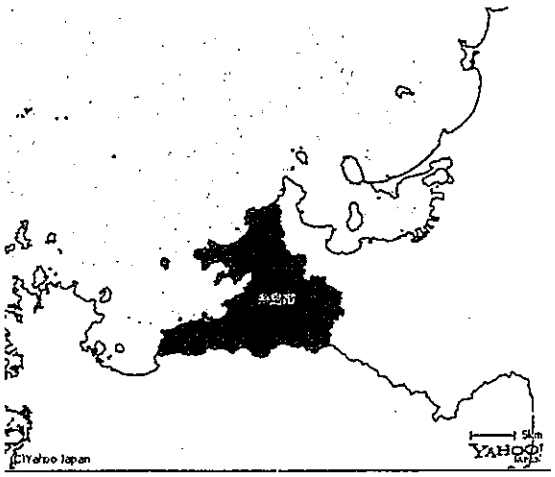
調査場所：糸島農協「伊都菜彩」

説明担当：なし

改選期に当たるため、行政による視察受け入れは中断中である。

また糸島農協の現地管理者（糸島農協直販担当：小金丸部長）とも事前打ち合わせをしたが、視察説明の対応はしていないとのことであった。ただし、施設の見学については問題がないとのことで現地見学による調査とした。

糸島市概要



糸島市は、福岡県最西部に位置する市で、糸島半島の中央部および西部と、その南側からその南西の福岡県西端部の一帯を市域としている。北側と西端部は玄界灘に面し、東側は福岡市に接する。南部は背振山地があり佐賀県と接している山岳地域で、南西部は唐津市に、南東部は佐賀市に接する。面積２１５．７０Km・人口100730人（平成29年末現在）。

筑肥線が東西に通っており、旧前原市域を中心に近年ベッドタウン化が進んでいる。また豊かな自然環境や、カフェ等飲食店舗の増加、福岡都心まで30分程度という地理条件もあり、注目を集めている。

２００９年、前原市・志摩町・二丈町による新設合併により誕生した。

面積			215.70㎢
国勢調査 人口	(2010年)		98,435人
	(2015年)		96,475人
人口増減率 (2010～2015年)			-1.99%
		(※)	-2.39%
高齢化率 (65歳以上・2015年)			26.80%
		(※)	30.90%
人口密度 (2015年)			447.30人／㎢
		(※)	152.90人／㎢

(※) 比較地域：登米市
(→比較する地域を変更できます)

調査の背景

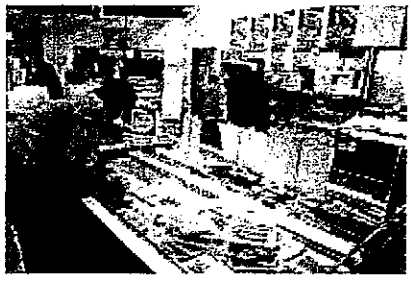
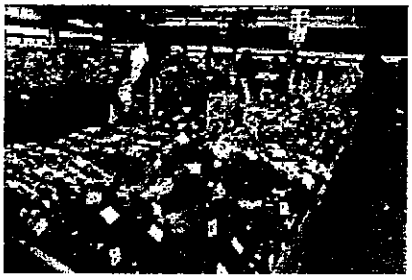
対象施設の「伊都菜彩」は日本一の道の駅として知られている。糸島農協で経営しており産直施設の位置づけである。

糸島市の HP によれば、

約 1,270 平方メートルの広い売場面積を誇り、「糸島の大地そのままいっぱい」と呼べるほど、豊かな食材が満載です。

JA糸島産直市場
糸 伊都菜彩

『伊都菜彩』は、糸島のみんなで育んだ農の恵みをみなさまにお届けするために、平成 19 年 4 月に生まれた JA 糸島直営の直売所です。
採れたての新鮮なおいしさに、私たちがお伝えしたい「糸島産」のすべてが、そのままいっぱい詰まっています。広い店内は、明るく、たくさんの農畜産物や海産物、加工食品やお惣菜などがずらりと並び、糸島の豊かな食材が満載です。

その設置目的には、「地域の食と農に関わる文化の発展と継承」や、「生産者と消費者の共生」を図ることがあり、「なんでも前原（地産地消）」の拠点となる施設の１つです。

と紹介されている。また１４００人もの出品者を地元に抱え、福岡市民の身近な台所として成功している様に、登米市に想定される今後の展開の一助を探るために視察とした。

なお事前電話打ち合わせにおいても、量的な忙しさ（売り場での現地作業）に追われている様子が伺い知れたところであり、民間施設であることを十分に意識したうえで調査した。

今回の調査については、先方自治体が改選期にあたり視察対応できないこと、および、施設設置者も視察対応まで手が廻らない状況を考慮しつつ、施設見学の了承は得られたことをもっての訪問となる。異例ではあるが施設見学を持て状況を理解するに留まるが、せっかくの機会でもあるから、学ぶこととした。

なお、事前の情報収集には
「健美伝心（http://kenbi-denshin.com/fukuoka/itosaisai-3347）」
が大変参考になったので申し添える。

太陽の会

所感

現地の立地環境であるが、国道２０２号バイパス一本で福岡市天神につながる交通の要所にある。また都市高速と直結する西九州道にも面しており、大消費地を間近に抱える好立地は交通量の豊富さからも伺い知れた。

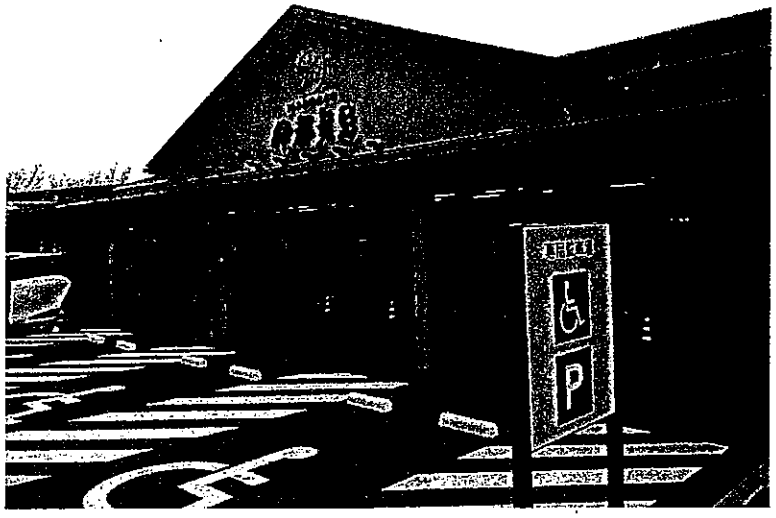
施設から感じとれるところとして、「道の駅」のイメージではなく、まさしく「産地直売所」である。広い駐車場も常に車の出入りがあり、非常に賑わいを感じるところである。この辺はまさにロードサイトの醍醐味であろう。我々が見学した時間帯は平日昼過ぎの比較的すいている時間と思われたが、それでも８割方駐車スペースは埋まっていた。建物自体に重厚さは感じないものの、大きな体育館ほどのフロア空間が広がる店内には収穫籠の状態で多くの商品が陳列されている様子は産直施設そのものである。

客層は、普段の食材を求める一般人（地域住民）が過半を占めると感じた。その点では通常の道の駅（観光などのついでに寄る立ち寄り施設）のイメージではなく、スーパー的な目的地として受け入れられている様子だ。確かに福岡市方面からと思われる（国道利用者）利用者も食材の買い出しに慣れている様子（行動に迷いがなく通いなれた様子）もあり、普段使いされている施設と感じた。

登米市内にも道の駅や産直施設は現在でもある。ただしその多くは、町域的な考え方から然程大きな展開はされていないと思われるところである。また道の駅は名の通り道の駅として、また産直所はその商圏を拡大させるに至っていない。商業ベースというよりは、地域農業の受け皿的な殻から大きく外れることはないと感じられる。

「伊那菜彩」はJAの施設とはいえ、ロードサイドの立地や施設面積などからすると、その立ち上げの際には行政の支援が多分にあったと推察される。しかし、現状では軌道に乗った経営も伺い知ることが出来た。これは単に事業者が儲かるだけではなく、生産者も儲かり、消費者の信頼も厚いということだ。全てにプラスになっている施設とみることが出来る。

また建物については十分な施設であるが、構造は鉄骨造りのように思えた。このあたり



も必要以上の重厚さがなく、民間流の考え方が反映されていると見た。このようなところも行政として、支えはするが経営は任せるといった側面をくみ取れる。行政の態度として戦略的な働きかけと、きっちり任せることの大切さは参考とすべきである。